



町民文芸

只見短歌会

四月詠草

大塚栄一

指導

幾つもの病もちたる我を言ひ金婚の夫の謝辞は短し

古川 英子

雪残る寺に集ひて法要す夫逝きてより十七回忌過ぐ

馬場 八智

伝ひ歩き始めし曾孫が我が背もつたひつつゆく手の温かし

皆川 恒子

華やかな思ひ出残す亡き友の柩にひくく名を呼びつづく

五十嵐夏美

春日さす庭に出したる大根の傷み選りつつ切干し作る

渡部ゆき子

久々に会ひし短歌の友らみな明るく優しく声かけくるる

五十嵐英子

広報の消息欄見て面影も朧となりし友の死悼む

吉津 政枝

雪解けの棚田に堆肥配り終へ飲む真清水のこの上もなし

目黒 富子

庭師来て剪定済みし老松は色鮮やかに枝張りて立つ

齊藤ちひろ

春早く芽を出したれど雑草と思はれ抜きしか忘れな草を

渡部ヨリ子

イベントに百キロの道を二十日間四時に起きつつ孫は通ひし

新国 洋子

(出詠順)

只見俳句会

五月例会

目黒十一

指導

雪柳ピアノの音に花こぼす

笑 羊

春眠し音つもりゆくシュレッター

リウコ

頻り鳴く鶯今朝も晴れ渡り

大川の流れ岩場に山桜

大土手に水仙咲かせ村明くる

一 穂

春耕や遠く人影ゆらゆらと

洋 子

花麩のる花見弁当開きたり

春出しの腰の痛さよ鳶の声

敦 子

春暁や目覚めつつ聞く鳥の声

山鳩の声の遠くに薯植うる

郁 子

満開の桜の迫る二階かな

あちこちと痛む会話や燕来る

礼

春風や観察会は水辺林

風さやか折れば音立ち初わらび

一 灯

父と子のキャッチボールや夕薄暑

なお奥へつなぐ道ありブナ若葉

雪解の川の光や町暮れる

邦 男

階段に介護手摺や春嵐

恒 夫

青鷺の眼のさだまりぬ日暮かな

雷やはなどりこぞう今昔

吉 児

いささかに酔いたる頬や朧月

内裏難介護ホームへ寄贈せり

隆 堂

旧道を行くやたら芽授かりぬ

鯉幟村に一本高々と

邦 夫

二股となる瀬の音や春の川

山よりも一足早き庭辛夷

康 女

芽を起こす雨や一日をこもり居て

味噌汁の味噌を溶く朝囀れり

